

Institute for Language Education
Aichi University, Nagoya

Boken News

No. 5 July 2001



Group Work in English

かわいい子どもたちも英語に懸命!!

(オランダ・アムステルダム・ニコラス小学校授業風景)

CONTENTS

- ・ EU の言語教育
(平尾 節子).....2
- ・ 倫敦地下鉄広告
(安藤 聡).....3
- ・ 中国と日本企業
(服部 健治).....5
- ・ 国際カヌー大会通訳
(藤森 猛).....11

外国語コンテスト

- ・ 英語部門
- ・ ドイツ語部門
- ・ フランス語部門
- ・ 中国語部門
- ・ 韓国・朝鮮語部門
- ・ 日本語部門
- ・ 日本語コンテスト入賞作
 - 第一位 日本の素晴らしい若者
(現代中国学部二年 晋 斗鴻)
 - 第二位 一緒に作っていきませんか
(現代中国学部二年 高 秀希)

EU の語学教育 「ヨーロッパ言語年 2001」

法学部
平尾 節子

2000年3月、ベルギー・ブリュッセルで開催された SIETAR (Society of Intercultural Education, Training, and Research) 学会世界大会において、Intercultural Communication in English Education as a Foreign Language というテーマで研究発表を行った。学术交流を通して異文化間コミュニケーションを体験する貴重な学会であった。ブリュッセル滞在中、ヨーロッパ連合 (EU) 本部、Council of Europe, 「教育・文化局」、ベルギー教育省などを訪問し、EU の言語教育に関する調査研究、資料収集、ディスカッションの機会を得た。EU はミレニアムの重要な教育政策として、“The New EU Education and Youth Programmes” を発表し、2001年を“ The European Year of Languages 2001” : 「ヨーロッパ言語年 2001」と定めている。

そのキーワードは四つ、(1)国境を越えて留学・交流する Mobility の促進、(2) “English plus” と称せられる複数言語運用能力の育成と多文化理解、(3) IT、情報通信技術(4)遠隔教育と生涯学習推進である。

そもそも、EU 統合の目的は、平和と繁栄であり、多民族・多文化・多言語の共生と発展である。1952年、ECSC (欧州石炭鉄鋼共同体) が、第一次、第二次世界大戦への反省に立って結成された。ヨーロッパの平和を維持するために、戦争に不可欠な石炭と鉄鋼の生産を共同管理する共同体を充足させたのである。1970年代には EC : European Community (欧州共同体) へと発展し、1991年には、マーストリヒト条約が締結されて、統合の「拡大と深化」を視野に入れたヨーロッパ連合

(EU : European Union) へと発展した。

EU 加盟国は、現在15カ国であり、EU の公用語は、デンマーク語、オランダ語、英語、フィンランド語、フランス語、ドイツ語、ギリシャ語、イタリア語、ポルトガル語、スペイン語、スウェーデン語の11カ国語である。

EU の言語教育政策の理念は、「言語の多様性はヨーロッパの文化遺産である。すべての言語が平等である。母語および EU の言語教育の推進は政治的・経済的な成功をもたらし、多様な言語の人々との交流、異文化理解を促進し、偏見・レイシズムを根絶するのに役立つ」とある。

「ヨーロッパ言語年2001」の目的は、「1 + 2」である。すなわち、母国語を完全に習得し、プラス他の言語を2カ国語習得することである。

「ソクラテス」(Socrates) : 総合的教育計画、「リంగా」(Lingua) : 外国語教育計画に基づいて、小学校から、「1 + 2」の複数言語の早期学習が推進されている。

「エラスムス」(Erasmus) 計画は、高等教育部門・



アムステルダム大学にて

大学生および研究者の交流推進計画であり、単位互換制、授業料免除のシステムのもと、マルチ・リンガルのヨーロッパ市民の育成を目指して実践されている。ちなみに、エラスムスはオランダの生んだルネサンス期最大の思想家である。ヨーロッパ各地を広く歴訪して学問を修め、思索を深め、封建社会の下で理性に基づく自由な精神文化

の確立に大きな足跡を残した。ヨーロッパ各地の文化人と交流し、その思想を開花させたエラスムスの名にちなんで命名された「エラスムス」計画は、彼の偉業にならって、ヨーロッパ各地の大学など高等教育研究機関が自由に交流する「ヨーロッパ学生交流計画」が、その中心的活動である。したがって、「エラスムス」の正式名は The European Community Action Scheme for the Mobility of University Students である。

2001年3月、オランダ・アムステルダムの小・中・高・大学、計8校を訪れた。最初の訪問は、Nicolas 小学校の5年生のクラス。All in English の授業であった。子どもたちは、洋の東西を問わず、かわいい。23名全員が、明るく活発に、英語コミュニケーション活動を展開していた。オランダの公用語は、オランダ語(90%)フリーズランド語(10%)で、学校教育の使用言語は、オランダ語である。英語は、公用語ではない。しかし、オランダの生徒・学生は、学校生活で英語を話し、能力も高い。言語政策として、英語の開始年齢は、小学校の最終2学年、すなわち、10歳から外国語としての英語が必修科目となっている。

Berlagelyceum 中学校1年生のクラスでは、英語でプレゼンテーションをしていた。積極的に、クラスの前へ出て、一人、または、ペア・ワークで声高らかに、発表する姿が微笑ましく感動的であった。中学校では、英語ともう1か国語が、必修科目。1年間の学習時間は、オランダ語160時間、英語133時間、フランス語またはドイツ語53時間。授業と宿題で1年間に、1,600時間。宿題が、各地域により義務付けられている。外国語教育の教育目標として、学習スキルの指導、実践的なコミュニケーションの指導に重点がおかれている。

外国語教育の成果は、小・中・高・大学において、各々到達目標の設定がなされ、卒業年度における到達度テストによって、その成果が示される。また、IEA(国際教育到達度評価学会)による国際比較の評価調査・報告が行われている。

アムステルダム大学では、学生たちは、各自のホームページを作成しており、その Website に

European Language Portfolio (ELP) が導入されている。このポートフォリオは、「ヨーロッパ言語年 2001」に示されている語学学習の水準に向けての自己評価記録である。Language Passport(学生の語学パスポート)、List of Examinations(語学学習の到達度テストなど)、Language Biography(言語学習歴)の3部からなっている。TOEFLなどの外国語検定資格や、交換留学プログラムへの参加、文通経験、外国語話者の訪問受け入れ体験、異文化交流体験などが記載されている。例えば、“My Language Skills”, “What I can do”, “I can read a menu.” など、具体的である。学生個人情報をどこまで公開できるのか、質問したところ、「外部に向けて発信できることが自分を見直すきっかけになる」、「インターネット上のホームページでオープンにすることで、地域社会の人々とも相互意見交換ができるのが役立つ」と語っていた。情報化時代の開かれた自己評価、自己PRの実態に接し、感動を禁じえなかった。

最後に、「ヨーロッパ言語年2001」の合言葉を紹介しよう。

“Learning languages opens doors, and everybody can do it!”

倫敦地下鉄広告

経営学部
安藤 聡

ロンドンの地下鉄は楽しい。などと言うと、車内は狭く汚いし冷房もないし運賃は高いし電車は時間通りに来ないし突然何の前触れもなく駅が閉鎖されるし長いエスカレーターはよく止まるので歩いて上り下りすることを余儀なくされるし縦んば動いていたとしてもエスカレーターのステップ

とベルトの動きが合っていないから右手だけ前に行ってしまうたり後ろに行ってしまうりするしあんなふざけた地下鉄のどこが楽しいのか、という意見もあるだろうが、広告が楽しいのである。駅の壁や車内を彩る広告を読んでいるとく何しろ来るはずの電車はなかなか来ないし、来たと思っ
て乗り込むと途中で訳もなく止まってしまうので、有り難いことに広告を読む時間は十分にある。英語の勉強になるばかりでなく英国文化の意外な一面が見えて来たりするのだ。例えば8月頃にはやたら花粉症の薬の広告がふえるが、このことは日本では春先が花粉症の季節であるのに対して彼の地では夏の終わりがその時期であることを物語っている。「花粉症」は英語で 'hay fever' というくらいだから干し草がその主な原因の一つなのである。

ここ数年で最高傑作だった広告はヴァージン・アトランティック航空のものである。この航空会社（最近では鉄道会社から生命保険、宝くじの販売までやっている。そう言えばヴァージンコーラというのもあった）は元々レコード会社が母体になっているため、機内のエンターテインメントが充実していることが売り物なのだ。エコノミークラスの全席にTVモニターをつけてニュース、映画からゲームまで楽しめるようにしたのもこのエアラインが最初であった。私も英国に行くときにはよく利用する。さてそのようなヴァージン・アトランティック航空であるが、その広告はエコノミークラスの座席に座った坊主頭の男の後頭部を大写しにして、広告文は 'Other airlines' in-flight entertainment 'とその後頭部に白抜きで書かれている。そして下の方に控えめに、' Fly Virgin. And get a seat back TV in Economy. 'と添えてある。確かにエコノミー席にテレビのない某N航空やZ空、或いはヴァージンの宿敵Bエアウェイズで日本から英国に行く場合、およそ12時間の飛行時間をずっと他人の後頭部を眺めて過ごすことになるのだ。なお、Bエアウェイズでも最近ではテレビモニターをつけた飛行機が増えているが、ヴァージンの真似をしたのかそれとも最近の国際線用旅客機

には標準装備でついているのかは定かではない。ヴァージンの広告は絵柄を坊主頭の男にしたことによって強烈なインパクトを与えることに成功していると言えよう。因みに ' Fly Virgin. ' は命令文で、' Virgin ' の部分は副詞だと思えばよい。つまり「ヴァージンで飛べ」という意味である。

最近のもう一つの名作はヘアカラーの広告であった。左半分には海を背景にヴィキニ水着の美女がブロンズの髪を海風に靡かせて俯き加減に微笑んでいる。よく見ると彼女は自分の水着のパンツの中を覗き込んでいる。そして左半分に広告文。' KEEPS HAIR COLOUR SO LONG YOU'LL FORGET YOUR NATURAL ONE. ' 判りますか？ 判らない人のために文法的に説明しておきましょう。この文はいきなり動詞で始まっているけれど、「三人称単数現在のs」があるから命令文ではないことが判ります。前に主語 ' IT ' が略されているのです。IT が指すのは勿論この毛染めです。そしてこれはいわゆる「so-that 構文」です。但し ' THAT ' は略されていますが本当は ' YOU'LL ' の前にあります。これで判りましたね？ 正解は「(この毛染めは)色がとても長持ちするので、生まれつきの髪の色を忘れてしまうでしょう」ということです。彼女が自分の下腹部を見て「生まれつきの色」を確認していることは言うまでもありません。

日本でもJR各社の広告には優れたものが多いが(何しろ山下達郎の歌を使って名古屋駅のコンコースをあれだけロマンティックな風景に描いてしまったJR東海のクリスマスシーズンのCMがその典型である)英国のBRも負けていない。JRが映像、雰囲気売り物にしているとすればBRは言語、ユーモアで勝負していると言えよう。民営化以前の頃の話になるが、ロンドン-ブリストル間の所要時間が大幅に短縮されたとき地下鉄に出た広告は、' We've made The Times's crossword more difficult. ' 『ザ・タイムズ』』といえれば保守派インテリ向け新聞の最右翼である。この紙面に毎日掲載されるクロスワードは大変難しい。しかも日本の新聞雑誌に時折あるクロスワードと違って

すべてのマスをただ埋めるだけで、そこにある単語が隠されているわけでも全部埋めると賞品がもらえるわけでもない。ただひたすら言葉を探して行くだけの知的ゲームである。長距離列車の車内では見るからに専門職という風情の「英国的」紳士が真剣な顔をしてタイムズのクロスワードを解いている光景をよく見かける。乗車時間が短くなれば当然解答のための制限時間も短くなるというわけである。同じ時期にロンドン - リヴァプール間にも高速の特急列車が走るようになって、その広告は 'Take twenty winks in our train.' であった。いくら何でも20回ウィンクする間にロンドンからかの港町まで行かれるわけではないのだが、これは英語によくある誇張によるユーモアである。またここでは 'forty winks' という「食後のまどろみ」を意味するイディオムとの関連を見落としてはならない。食後のまどろみの半分の時間でリヴァプールに到着してしまうということなのである。ピートルズならこれを「黄金のまどろみ」 'Golden Slumbers' と歌うところであろう。それにしても知的なクロスワードと怠惰な午睡のコントラストはブリストル行きの特急とリヴァプール行きのそれとの客層の違いを反映していると考えるのは深読みし過ぎだろうか。ついでながら今ヴァージングループはとても速い高速列車の導入を予定しているらしい。これが営業運転を開始した暁にはまた広告コピーが楽しみである。

ロンドンの南西のケント州は「ガーデン・オヴ・イングランド」と通称される美しい田園地帯であるが、ここに「イングランドで最も美しい城」と言われるリーズ城がある。この城はおよそ900年前ヘンリー1世の時代に建てられ、のちにヘンリー8世が作らせた豪華な大広間が有名である。ご存知の通りこのヘンリー8世はとんでもない奴で、宗教改革を行なってイングランド国教会を創設したことで知られるが、その理由が妻と離婚して愛人と結婚したくなったのにローマ法王がそれを許可しなかったからローマン・カソリックを脱会して自分で勝手に教会を作ってしまったということだから笑うしかない。結局妻を処刑して愛人アン・

ブーリンと再婚するがこの新しい妻にもすぐに飽きてしまい、次々と離婚再婚を繰り返しては前妻を処刑していった。このヘンリー8世の城でもあったリーズ城の広告は次のようなものであった。 'Now Henry has gone, it's perfectly safe for wives.' 文頭の 'Now' は後ろに 'that' が略されていて、接続詞である。「.....した今となっては」くらいの意味だ。危険人物ヘンリー8世は1547年に死んでしまったので、今となっては奥さんたちがリーズ城に行っても全く安全なのであった。

最後に、これは広告ではないが、地下鉄の扉に必ず貼られている注意書き 'OBSTRUCTING THE DOORS CAUSES DELAY AND CAN BE DANGEROUS' (閉まる扉の前に立つと電車の遅延を引き起こし、また危険でもある) に対する定番の落書きがある。それは 'OBSTRUCTING' の 'ING' と 'CAUSES' の三単現の S, それに 'CAN' の3カ所を塗りつぶしてしまうだけの簡単なものだ。これによって注意書きは 'OBSTRUCT THE DOORS CAUSE DELAY AND BE DANGEROUS' になる。そうなる意味は「閉まる扉の前に立ち、電車を遅らせ、危ない目に遭いなさい」という命令文になってしまう。落書きの犯人が几帳面な奴の場合、'DOORS' の後にちゃんとコンマが打ってあったりする。

中国と日本企業

現代中国学部
服部 健治

三資企業の「駆け込み寺」

厳しい寒さがようやく終わり、長安街に立ち並ぶ街路樹の木々に青葉が芽を吹き出そうとしてい

た今年3月末、さまざまな思い出を脳裏にひそめ、重い荷物を引きずりながら北京空港をあとにして日本に帰国した。1995年3月末に日中投資促進機構北京事務所の首席代表として北京に赴任して以来、ちょうど6年間の北京駐在であった。

私が属していた日中投資促進機構とは、1990年3月に日本政府（主に通産省と外務省）の指導のもとに、日本の経済界の肝いりで成立した半官半民の公益団体であり、名前のとおり日本企業の対中投資を支援することを目的としている。中国側にも対外貿易経済合作部（石光生部長）を中心に投資に関係する行政機関から構成された「中日投資促進委員会」という中央政府の批准を受けた組織が1990年6月にできている。中国側の機関と協力しながら日本企業の対中投資の拡大に力をつくし、日中双方の機関どうしの定期交流などを実施してきた。

もともと私は財団法人日中経済協会という通産省（現在は経済産業省という）の外郭団体から出向という形で北京に派遣されたものである。日中国交正常化の時に発足した日中経済協会という組織は日中間の経済交流に従事する公益法人であるが、その前身は国交関係のないときに活躍した覚書貿易事務所、通称LT事務所と言われていたものである。

今の若い人には日本と中国が外交関係のなかった時代とはどんな状況か想像できないと思うが、日中両国の今日あるのも先人たちの苦勞の積み重ねであると想起してもらいたい。Lとは中国最大の知日家であった廖承志、Tとは満鉄の総裁も歴任した経済界の重鎮、高崎達之助のイニシャルである。LT事務所を引き継ぐ形で日中経済協会が誕生したのである。私は日中経済協会に20数年勤務し、帰国とともに円満退職し、愛知大学に奉職した次第である。

さて、日中投資促進機構北京事務所の任務は、次の3つに集約される。ひとつは日本企業の対中直接投資を側面から支援する仕事である。対応する企業は、まったく中国の事情を知らない中小企業から中国と関係の深い大企業までさまざまであ

る。また、相談を受ける内容も簡単な統計数値の紹介から、合弁契約書のチェックと千差万別である。要するに一種のコンサルタント業務といえる。

二つ目はすでに中国に進出している企業がぶつかる問題、トラブルを処理し解決する任務である。なぜ既存の企業を支援するかといえば、それはこれから中国に来ようとしている日系企業のためでもある。新しく中国に進出を計画している企業は、もちろん日本においても中国のことを研究しているが、それはあくまで書物の上の知識にすぎず、進出を予定している中国の都市にすでに現実に投資をしている同じ日本の企業を訪問し、その実態を視察し、意見を伺うのが常である。机上の調査よりも実態の把握が重宝されるのは当然といえる。そのとき既存の進出企業から、この地はトラブルが多いところだから慎重に考えたらよいなどと言われると、新しい企業は躊躇する。こうなると対中投資は促進できなくなる。そういう意味ですでに中国に出てきてがんばっている日系企業を応援することは大切なのである。

3つ目の任務は、投資に関連する情報（中国政府発表の通達、法令、規則なども含む）や資料を収集し、日本の関係企業、地方自治体、政府部門に紹介すること、並びに中国各地の投資環境を調査・研究することである。中国各省市、とりわけ投資誘致が熱心な沿海地区の経済技術開発区や保税区の資料や地域関連情報、また税務、税関、労務、外為、金融、外資政策などの部門別関連情報の入手、分析が肝要である。さらに投資促進は中国経済の全般的な動向とも密接な関係があり、マクロ分析もおろそかにできない。3つ目の任務は総じて紹介、調査、研究の活動といえよう。

北京事務所の仕事は最近では上記の2と3の任務が中心となっていた。とりわけ中国各地でがんばっている日系現地法人（それを合弁、合作、独資の形態を表す三資企業という）のために、投資にまつわるさまざまなトラブルの相談にのり、時には中国の中央、地方の行政機構に乗り込んで談判したり、要望を伝えたりして支援してきた。そのため私の北京事務所は、「三資企業の駆け込み

寺」と推奨された。こうした事業が遂行できたのも、中国各地の日系三資企業の支持と北京の日本大使館はじめ上海、瀋陽、広州の領事館の協力のおかげと深く感謝している。

中国の課題

1995年から6年間、変貌する北京に滞在して何よりも感じたことは、中国人一人一人が自分の顔を持って主張し始めたことである。私は80年代半ばにも4年間北京に駐在したが（1984年12月から89年2月まで日中経済協会北京事務所にて勤務）、当時中国人は個性というものを表に出さなかった。ましてや自分の意見などは普通の庶民は主張しなかった。中国民衆はよく比喻としていわれていた「蟻」のような存在であった。しかし、10年の星霜は社会の様相を大きく変えた。

北京にいてさらに感じたことは、人々の心の中に絶対なものとして占めていた国家の重みが相対化し、価値の多様化が進行してきたことである。他方で「衣食足りて礼節を知る」という言葉が現実化してきた。これは競争原理と自主・自立・自尊を基調とする市場経済が浸透してきた証左だと思う。

中国の市場経済化は、農村の伝統的な自給自足経済と国有企業を主体とする統制経済の2つの方面から解体が始まったのであり、まさに農村の貧困と都市の束縛からの脱出、だからこそ鬱積したエネルギーは凄まじく、この激変が多くの人々を魅了するのである。今後は市場経済の全面的な展開のもとに社会の安定、経済の持続的成長、共産党権力の正統性の保持を目指すと思われる。

だが、残念ながら改革・開放政策のもとでリッチになることだけに邁進したがゆえに、市場経済に見合った法治主義の教育を怠り、私営化を律する倫理と精神の培養が欠落していると言わざるを得ない。商道徳の希薄な経営者、腐敗した行政官の蔓延と、日本の近代化過程の明治期に日本人が持っていた公私峻別の観念と『道徳的緊張』（司馬遼太郎）は醸成されていない。

その上、普通の庶民が生きんがゆえに学んだこ

とは、50年代末の「大躍進」では嘘をつくこと、60年代後半からの「文化大革命」では人を信用しないこと、80年代以降の「改革・開放」では人を利用することである。悲しい現実であるが、中国人の性格形成にはそのような側面も影響していることをしっかりと理解する必要がある。人口が超過密で分配のパイが小さく、物資欠乏の社会で生活し、お互いに競争してきた庶民の心情を日本人が会得することは難しいが、想像をめぐらすことは相手を理解するうえで大切なことである。中国社会を一言で形容するなら“旗は共産主義、政策・方針は社会主義、やっていることは資本主義、地べたは封建主義”と揶揄できる。

中国はWTO加盟（加盟はチャンスでありチャレンジであると言われている）、人口（余剰労働力の増大のみならず、人口構成の老齢化も注目のこと）、資源（エネルギー、食糧も重大だが、深刻なのは水資源の枯渇）、食糧、環境、経済格差（所得、地域の格差以外に業界格差も存在）、少数民族（外部勢力とどう結びつくかがポイント）、台湾問題（日本は台湾問題は中国の内政問題だということ）を堅持すること、中央と地方の関係など、直面する課題は決して少なくない。

今後の注視事項

これからの中国を考えるうえで注視しておくべき事項は、次のような内容であると思われる。

徴税制度強化の過程で芽生える納税者意識の昂揚と国政代表権の要望。発展途上の国が近代国家を形成する上で不可欠な政策は、国民の識字能力を向上させたりする教育制度の完備、国防の強化を図る徴兵制度の拡充、そして国家財政の基盤を安定化するための徴税制度の整備である。日本の明治時代も学制、兵制、税制の確立を推し進めた。中国の場合、歳入に占める直接税の比率が3割と低く、安定した財政基盤の確立が求められている。近代化でどうしても避けて通れない徴税制度の強化の過程は、一方で徴税した金かどのように使われるのか確認を求める納税者意識が芽生え、いずれ国政参政権への要望となって高揚する。そ

の場合国政機構が民意を反映できないと深刻な矛盾が発生すると予測する。アメリカ独立戦争も発端は税金問題であり、日本の消費税率値上げで自民党も下野したことがある。それほど税金は敏感な問題なのである。

中国経済はGDPで把握されない裏の経済構造が歴然と存在する。どんな国家もGDP統計で捕捉されない1~2割程度のアンダーグラウンド経済（または地下経済とも呼ばれる）を内包するが、中国の場合は、それがGDPの6割程度までの規模を持っていると推測する。つまり中国経済は二重構造になっていると考えるのが、私の中国長期滞在の観察から得た仮説である。裏の経済構造は必ずしも不法な経済活動だけを指しているわけではなく、これまでの慣習や計画経済と市場経済の間隙から生じる経済行為を意味しており、これを第2経済と呼称したい。今後は第2経済の構造が第1経済の秩序に与える影響と桎梏が問題になると予測する。

改革・開放政策が実施されて以来、中国は国有企業改革に必死に取り組んでいる。朱鎔基総理が就任した98年からは3大改革のひとつに取り上げられ、しかも最重要課題となっている。しかし、企業改革のひとつの柱である人材育成を見てみると、MBA取得と高級エンジニアの育成に熱を上げている反面、経営哲学をもった企業トップと中下級技能者の養成は軽視されている。

戦後日本が発展したのは、企業は人である、お客様は神様であるといった哲学を持ったリーダーが会社を引っ張り、同時に江戸時代から引き継いだ匠の精神を持った技能者が大量に存在したからだと判断する。中国の高級ホテルに入ってみると、外装は立派であるけれど、よく見るとタイルの貼り方が粗末でゆがんでいたりする。また道路の敷石もガタガタといったのをよく見かける。こうした施工技術は高級エンジニアの問題でなく、日本でいう高等工専レベルの技能問題である。中国は“打工”と呼ばれる一般労働者は無数にいる。それは技能者ではない。また、MBA資格の取得と高級技術者をたくさん養成することが経営者人材の

育成と考えられているが、資格だけで企業の経営はできない。中国では企業家と起業家の両方の精神を持ったトップ経営者と物づくりにいそむ技能者に対する社会的評価を高めなければならない。

市場経済の基礎は信用の確立にある。この問題は2つの側面があり、ひとつは金融制度面の拡充、あとひとつは企業人の倫理の問題である。中国では手形や小切手の不渡りを出しても、罰金で済まされる。日本では2度不渡りを出すと、取引銀行のみならず、すべての銀行との取引業務が停止となり、以後現金取引をせざるを得なくなる。それほどまでに日本はじめ先進国の信用制度は厳しいが、中国では市場経済の歴史が浅いがために信用制度の運用に大きな欠陥がある。

その上、中国国内では物の売買において売掛金、債権の回収が極めて難しい。物を売っても代金が半年も一年も回収できないのである。国内販売をする多くの日系企業が直面する難題のひとつである。90年代初めに中国の企業間の負債付回しである「三角債」が話題となったが、今なお代金の回収は困難である。そこに見られるのは市場経済原理を理解せず、契約観念が希薄で商道徳、倫理観が欠如した企業人の存在である。マックス・ウェーバーが描いた『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のような風土はない。さらに懸念されるのは、信用創出の欠落した中国経済が信用を重んじる国際金融と連携をするなかで生じる摩擦である。すでにこの問題は、各地の国際信託投資公司（通称ITICという）の債権問題として浮上している。

価値の多元化に対応した国家機能と行政組織の近代化。市場経済を導入して以来、中国政府は「マクロコントロール」という言葉を頻繁に使うようになった。国家は計画経済時代のような上意下達の“制度としての国家”から市場経済に参加する1プレイヤーである“機能としての国家”に転換をはじめている。つまりこれが財政・金融政策から産業政策までかわる間接管理なのである。しかし、市場経済の発展のなかで階層、地域、業界の分化が生じ、利益集団が形成され、相克する

利害をいかに調整するかが問われてくる。私営企業の抬頭の中で市民の権利意識も強くなると想像できる。党機構が国家機構の上に君臨する形態に矛盾が生じてくると思われる。

さらに行政組織そのものの近代化が問われてくる。中国でがんばっている日系三資企業の方々が、日ごろ中国投資で直面する問題を簡潔にスローガン化している「不透明、唐突、曖昧」と言う言葉がある。透明度の低い政策決定過程（いつ通達や措置が行政機関から発表されたのか分からない）、遅れている広報活動と情報開示、事前の予告もない突然の方針転換（もっと酷いのは遑及して徴税される）、規範性と統一性のない政策執行（中央政府の発する通達はひとつなのに、末端の各都市ではばらばらの執行が現実である。このような現象を“上に政策あれば、下に対策あり”と言う）、こうした日本では考えられない事態のなかで多くの日本企業は日夜悩まされている。

日系三資企業が日常的に付き合うのは、末端の行政機関の役人である。例えば、税関、税務、公安（警察）、工商行政管理（企業登記を担当）、輸出入商品検査、労働、消防、衛生、供電といった機関である。時には納得のいかない不合理な金を取られたり（乱收費という）、余分な税金の追徴、不可解で余分な費用の徴収、地区によって機関によって対応する人によって異なる事務の取り扱い、熱意も誠意もない行政官の態度、不愉快極まる腐敗した末端役人。こうした現象を「不合理、不公平、不誠実、不愉快」の「4つの不」=中華スーブ（中国語の発音で4はスー、不はプ）と集約される。強固な中華思想の伝統文化とともに、三資企業で働く日本人は、日々「中華スーブ」を味わっているのである。

司法権限の独立と強化。密輸事件（中国語で走私と言う）ニセモノ商品（假冒商品とよばれる）の横行の増大につれて、経済犯罪に関する裁判の公判が中国のマスコミで頻繁に見られるようになった。日本企業も売掛債権の回収のため、裁判に訴えるケースも増えている。しかし、2審（中国は2審制）で勝っても司法の強制執行ができな

いまま放置される例も多い。司法の権限が弱く、時には地元企業をかばって執行しないからである。多くの裁判官は人民解放軍を退職した人が第二の人生として地元の人民代表大会の承認を得て就任している。そのため地元にも不利になることはしない。司法の行政からの独立がなく（中国は三権分離でない）、地方保護主義の厚い壁があり、人治から法治と叫ばれながら、法の執行は時には効力がない。司法権限の強化は法治主義のバロメーターであり、近代化のパラメーターでもある。

人民解放軍は共産党の私兵か国軍か。建国50年以上もたつが、軍は依然として一政党の軍として存在している。つまり論理的に考えると、軍は畢竟党のためにあり、国家のためでない。そうすると民族のためでもないとなる。日本では自衛隊は自民党のために戦うのではなく、国家のために戦うとなっている。欧米諸国もしかりである。それが本当の国軍である。台湾の軍隊も以前は国民党の私兵であったが、民進党に政権が交代しても軍は国民党でなく、国軍として国に忠誠を誓っている。

中国では軍は共産党の兵隊であるので、国のために戦うとなると、党=国家という論理を常に掲げなければならない。この論理からは党は常に正しく、人民の利益を代表しているとする論調が出てくる。それは前衛論と言われる。人民解放軍は共産党一党独裁の実体であり、権力行使の中枢である。今後は党の私兵か国軍かといった論議が起こる可能性がある。その論議はひいては党の正統性の問題まで波及する微妙な内容である。

「市場としての中国」に対する経営戦略

中国側の統計によると、中国に進出している日系企業は2000年末で2万件に上る。業種は90年代に入り、多様化してきたが、製造業が依然8割を占めている。電気・機械、繊維・アパレル、化学が御三家といわれる。投資地域は、やはり圧倒的に沿海地域であり、中国政府が「西部大開発」政策で希望する中西部地域への日本企業の投資はまだまだ少ない。内陸では西安、成都、重慶、武漢

にそれぞれ40～50社の企業が進出している。

日本企業の投資形態の6割が合弁で、最近では独資(100%外資)が伸びており、3割を超えてきた。進出動機は、80年代の輸出志向の加工貿易型から90年代は中国国内の市場を狙う国内市場志向型への転換が始まっている。

収益の動向では、高収益、低位安定、赤字の3分極化がますます著しくなっている。原材料・部品を7割以上中国国内で調達し、加工して海外に輸出するパターンが一番もうかっている。2番目は海外から持ってきて、中国で加工し海外に輸出する、本来の加工貿易型である。中国国内で調達して、主として国内に販売する形式は、ものすごくもうかっている企業と赤字企業の二分化が激しい。収益率が芳しくないのは、海外から輸入し加工して主として中国国内に販売する形態である。中国国内市場は販売が難しいのである。

中国に進出してきた多くの日系企業に投資動機を尋ねてみると、異口同音に中国市場は将来の潜在的発展の可能性が高いからと答える。中国の発展に対する期待が大ききことが窺える。そして個々の企業が進出に当たって作成するフィジビリティ・スタディー(F/S)では、2～3年先には大きな収益が見込まれると明記されている。しかし、実際に事業に当たってみると、予想に反して収益が伸びず、その上中国側パートナーとの摩擦や理不尽な行政機関の対応に悩まされいるのが実態である。

それでは一体、微分・積分の高等数学を駆使して作成したF/S書とは何なのか。そもそも中国に進出を考えた動機は何なのか。こうして掘り下げてみると、本当のきっかけは、会長や社長がかつて中国で過ごし、ノスタルジアがあり中国へ投資したいからとか、もともと取引のあった中国企業から投資を申し込まれ、関係が大事だから投資をはじめたとか、同業他社が進出したので遅れまいとして投資をしたとか、水面下では実に単純な契機が中国進出の動機となっている場合が多い。こうした目に見えない日本企業を縛る意識をもって「ムード・情実・切迫観念」と名づける。今問

われているのは、そのような潜在意識の点検である。難しくいうなら、「市場としての中国」に対する経営戦略の見直しである。

「ムード・情実・切迫観念」の潜在意識をチェックしたあと、中国進出にあたり考慮すべき課題は、「現地化」と現地法人の権限強化である。「現地化」に関して言うなら、多くの日本人が中国現地に乗込み事業をリードする時代は終わっている。中国人の高級管理者をいかに養成するのか、技術移転を通じていかに現地で新技術を開発し、設計能力を高めるのか、いつまでもメインバンクに頼らず、どのようにして中国で資金を調達するのか、品質のよい原材料・部品をいかに中国で見つけ、育成するのか、こうしたことが「現地化」の出発点である。欧米企業のようにすべての管理を中国人に任せることは難しいとしても、中長期の視点から中国人管理者の登用は重要である。

中国現地でがんばっている日系三資企業の責任者に対して一番悩むのは何かとたずねてみると、本音で告白するのは、中国で発生する「中華スラブ」でなく、本当は本社との関係である。本社が中国という国情を理解せず、何でも現地法人に押し付けてくるのである。WTO加盟後の中国市場は競争がもっと激しくなると予想される。そうした状況のもとで、いちいち本社の指令を受けて行動していたら市場のニーズに合わなくなる。即断即決が今後ますます要求されてくる。“敵”は目の前の中国でなく、後ろにいる本社である。これをもって「敵は本能寺にあり」という。

また、現地の責任者も「総経理」と呼ばれ、財務・会計の親玉のような表現であり、本人も本社に対して依存心を起こさせる。日本語でいうと「社長」なのであるが、権限が弱い。日本人は社長と呼ばれると緊張するが、中国では同じ漢字を使用するものだから、「総経理」となる。こうした表現問題はじめ派遣される日本人社員の再教育も必要である。

日本企業も中国に進出してすでに15年以上の経験を積んできた。なかには高い収益率を上げている企業も存在する。そこには自分たちであみだし

た経営戦略が活きている。高級ブランドイメージを武器に市場参入する方式で、これを称して「階層限定型戦略」という。中国社会も階層分化が進行してきており、安いというだけでは売れない商品もある。次に販売する地域をしぼる方式である。これをもって「地域限定型戦略」という。例えば、華東地区の上海、江蘇、浙江だけで2億近い人口を擁し、日本以上である。何も中国全土に販路を広げる必要はない。

最後に、中国との事業を展開する日本企業が問われているのは、日本的経営体質、経営方式のあり方である、といった視点を欠かすことはできない。

国際カヌー大会通訳

現代中国学部
藤森 猛

4月27～29日、「2001三好カップ国際レディースカヌー大会」(愛知県カヌー協会・三好町主催、日本カヌー連盟・中日新聞社共催、国際カヌー連盟公認)が三好池で開催され、世界10カ国の選手37チーム、167人が競技に参加した。この外国選手チームの出入国・宿泊・練習・競技・セレモニー・監督会議・表敬訪問・ショッピングなど1週間の全日程に、現代中国学部学生23名が通訳として従事した。現中国学部生の国際カヌー大会への通訳としての参加は、1999年、2000年に続いて3回目であり、本年は中華マカオチーム、韓国チーム、中華台北(台湾)チームを担当した。

(1) 外国選手の受け入れ

例年、多くの学生が初めて通訳を経験する中で、一番緊張するのが名古屋空港への選手・監督の出

迎えである。特に中国語の場合は、例えば、一昨年の福建チームの時は福建語、昨年の上海チームの時は上海語というように、その出身地によって使用する方言が異なり、また選手団がどこの出身かを知らずに通訳を担当することになるので、なおさら緊張に輪をかけるのである。今年の場合は、純粋な広東語を話すのがマカオチームであり、福建語(閩南語)を話すのが台湾チームであり、さらにロシアチームの監督は台湾出身であり、福建語と英語を話した。

学生さんたちは、最初の一言を何と言って出迎えたらいかが悩むようであるが、「你们好!」(こんにちは)、「欢迎来到名古屋!」(名古屋へようこそ)と言うことができれば十分である。今年のマカオチームの乗る飛行機は到着の予定が変更され、20:55分着となり、台湾・ロシアチームと合同で出迎えることになった。マカオチーム担当は3年生の金海亜来さんであり、選手たちを多少引きつった笑顔で迎えることになったが、わりと度胸がすわっていた。宿泊地である「丰田世紀飯店」(豊田センチュリーホテル)まで大会役員らと同乗し、明日以降のスケジュールを監督に伝えた後に、初日の通訳業務を完了した。

(2) 表敬訪問

外国の訪日団を迎える際に必ずスケジュールに組み込まれているのが、受け入れ団体への表敬訪問である。国際レディースカヌー大会では三好役場の会議室において、三好町長、国際カヌー連盟の役員などの前で、各国の監督が挨拶をして、担当の通訳が日本語に同時通訳する。スピーチ通訳においては、原稿が予め準備されている場合とそうでない場合、一言一言区切って同時通訳する場合と最後にまとめて通訳する場合など、通訳の方法が異なる。通訳に求められるのは、一つには日時・場所・人名などを正確に伝えることであり、また一つには“長すぎず、短すぎない”的確なコメントである。

例年の各国チームの代表者スピーチにおいて、アメリカ・ニュージーランドなどのスピーチは、

プライベートな感情をわりとストレートに表現する傾向があるのに対し、中国・台湾・韓国・ミャンマーなどのスピーチは、チームとしての謝辞を重視する傾向がある。中国語スピーチの定番としては「尊敬的 先生(尊敬する 様)でスピーチを始め、段落の終わりに「我代表 表示衷心的感谢!」(私は を代表いたしまして、衷心より感謝申し上げます)という謝意を挿入して参加者からの拍手をいただくことが多い。

さて、同時通訳を行ったのはマカオチームが4年生の土井綾香さん、台湾チームが3年生の小出有香さん、韓国チームが3年生の禹相栄君である。それぞれが初めての同時通訳であったため、傍らに座るこちらの方もときどきしたが、なんとか無難にこなし。スピーチ通訳は、あまり細かいことにとらわれず、堂々とゆっくり話せばよいのである。

(3) カヌー競技大会

競技前日には練習、技術講習会、監督会議、開会式等のセレモニーが行われる。特に競技ルールを確認する監督会議の通訳の際には、カヌーの専門用語を200語近く知らなくてはならない。毎年、学生さんたちには中国語のカヌー語彙集を事前に配布するのであるが、競技そのものを日本語で理解していないと通訳は難しいものとなる。また例えば中国語のカヌー用語においては、カヌー(カヤック)のことを中国大陸では「皮划艇(皮艇)」

台湾では「轻艇」、マカオでは「独木舟」と呼び、地域によって専門用語に若干の相違があることにも注意しなくてはならない。

さてカヌーレース競技は、第一日目が500メートル競争、第二日目が200メートル競争であり、それぞれ「単人皮艇, 単人皮艇, 単人皮艇」(シングル、ペア、フォア)の3種目において、「预赛, 半決賽, 決賽」(予選、準決勝、決勝)が行われる。通訳の主な役割は、各レースの30分前の「检录」(配艇: 最初のエントリー受付)において選手を的確に誘導し、レース後に「船艇检查」(検艇: 艇の重量検査)を選手に指示し、さらに監督・コーチのクレーム・要望などを大会本部に伝えることにある。今年の競技大会当日には、各チームにそれぞれ4人の現中学部生が通訳として同行した。

今年の大会では中国大陸チームが参加しなかったこともあり、競技はハンガリー・ドイツ・アメリカなどの欧米チームが上位を独占した。K - 2 (カヤック・ペア)で優勝したハンガリーチームを「Congratulation(s)!」と言って祝福すると、選手たちがとても喜んで握手で応えてくれた。また日本を含めてアジアのチームでは、唯一韓国チームがK - 4 (カヤック・フォア) 500メートルにおいて3位に入賞したが、この時ばかりは学生の人たちと一緒に「힘내라!」(頑張れ!)と応援した。また大会第二日目は雨が降り、競技場の池はかなり寒くなっていた。4年生の高ヶ内麻美さん、木村知美さんらのアイデアで、通訳の4人の愛大生が着用していた揃いのピンクのジャケット4着を、台湾チームの選手4人にユニフォームとして提供した。小雨の中で、ピンクのジャケットを着用した台湾チームのフォア艇が入賞した。

通訳の活動は、単に専門的な外国語の語彙を知っていればよいのではなく、第一に朝から晩まで活動できる体力、第二に雰囲気や和らげる笑顔、第三に相手を気遣う思いやりが必要である。このことを1週間にわたる愛大生の国際カヌー大会通訳に同行して、あらためて学ぶことになった。



カヤック・フォア500m (マカオチーム)

第6回 外国語コンテスト

英語部門

2000年度外国語コンテスト英語の部は、11月27日（月曜日）午後4：40から103番教室において開催された。2000年度は、昨年より10組ほど少なく、ほぼ一昨年並みの16組（うち一組欠席）の参加があり、約1時間半にわたり熱演が繰り広げられた。審査員は、本学教授 John Hamilton 氏と、昨年に引き続き本学名誉教授、池稔氏の2名にお願いした。司会進行役は、本学助教授片岡邦好氏が務めた。

昨年から審査内容の幅が広がり、「英文の暗唱（指定課題、または自由選択）」と「英語の歌（曲目自由）」のいずれかの選択となっている。指定課題には約10ほどの選択肢があり、童話・童謡、詩、歌、論説文、文化論など、多彩なジャンルからの選択が可能であった。これらの指定課題の中から約半数の課題が選ばれ、特に人気が高かったのは童話“ What the moon saw（4名選択）” “ Clever Beasts（3名選択）”，そしてシドニー・オリンピックにおける高橋尚子選手の活躍を描いた論説文、“ Breakaway（2名選択）”であった。これらの課題に人気が集中したのは、何よりもとつきやすさと馴染み深さが関係していたようだ。このほかにも、“ Love me do,” “ Yesterday,” “ Imagine,” “ If we hold on together ” など、ビートルズを中心に自選の歌唱課題を持ち込み、独創的なパフォーマンスを見せてくれた参加者もいた。

審査の結果は、第1位が“ Imagine ”を歌った法学部の久田裕人さん。歌唱演技の前にスピーチを行い、創作的な要素を取り入れたことが審査員の心証を高めたようだ。第2位が“ Breakaway ”を暗唱した経営学部の矢野哲史さん。第3位は、

“ What the moon saw ”を暗唱した経営学部の松元香保里さんに決まった。審査結果は、上位グループ、中位グループにおいては僅差で甲乙つけがたい状況であったが、上位のこの3名は出色のパフォーマンスを演じ、他を一步引き離して文句なしの受賞となった。

（片岡）

ドイツ語部門

多少ニュースとしては時機を失した感がありますが、恒例の名古屋語学教育研究室主催第6回外国語コンテスト・ドイツ語部門本選が昨年2000年12月5日（火曜日）205番教室で開催されましたので、結果を報告いたします。

今回から新任の島田了先生を迎えての再スタート、新鮮な気持ちでコンテスト開催を、と張り切ったつもりでしたが…。ドイツ語各クラスで授業時間にそれぞれ予選を行い、本選は参加者16名（1名は当日欠席）で競われました。島田先生が司会を、竹中が審査を担当しました。例年に比べやや参加者が少なく、また、課題文暗誦を本選では「朗読も可」としたことによって、審査基準が統一できず、「厳正な審査のもとに」というわけにいかなくなり、悔いを残すコンテストとなってしまいました。

本選参加者（受け付け順）は、長野衣里さん、鈴木隆敏君、西川寿美礼さん、竹添弓夏さん、伊藤香代さん、長谷部佑介君、渡辺智也君、竹中佳美さん、前島志保さん、八木弘君、伊藤有香さん、苅谷なぎささん、小田悦子さん、鳥見篤史君、塩屋章君、上野麻子さんの16名でした。

課題は、1年生ドイツ語統一テキストの Gabi

und Frank 第12課の暗誦、1年生のテキストですが、電話による長文の会話文で単語もかなり発音の難しいものが多く、課題文の暗誦は参加者には難解な課題だったようです。審査は、第1次審査、第2次審査に分けて、発音の正確さ、会話文としての表現力の2点を基準にして行いました。第2次審査へ進んだ鈴木隆敏君、西川寿美礼さん、竹添弓夏さん、伊藤香代さん、渡辺智也君、前島志保さん、塩屋章君の5名で優勝が競われ、結果第1位（優勝）は00J1426西川寿美礼さん、第2位00J1412渡辺智也君、第3位00J1359伊藤香代さんに決定しました。

上記3名の優秀者は12月12日（火曜日）開催の表彰式において田川光照研究室長より武田信照学長賞として表彰状と賞品が授与されました。表彰式に続いて発表会が行われ、第1位の西川さんはこの間にさらに練習を重ね、課題文暗誦を参加者の前で発表し、満場（!?）の喝采を受けました。

今回まで6回と回を重ねて来たコンテストでしたが、課題の選択、選考会の運営、審査方法のあり方等において工夫が足りなかったことを反省しています。次回からは新規巻きなおし、質的にもさらに向上した外国語コンテストを実現すべく努力したいと考えています。なお、例年のことながら、今回のコンテスト開催にご協力下さった教職員の方々、果敢に課題文に挑戦し、予選・本選に出場してくれた学生の皆さんにここに改めて心よりお礼を申し上げます。

（竹中克英）

フランス語部門

フランス語コンクールについては、出場者が多かったことが今年の特徴です。すなわち41名あり、昨年の4倍でした。その大半は2年次生でした。

コンクールの審査は、シャンソン『ミラボー橋』の作詞家で、有名な詩『ひなげし』の作者でもあるアポリネールの短編小説『アムステルダムの水夫』のテキストの朗読で行いました。発音、イン

トネーション、アクセント、表情表現など、このテキストがもつ難しさの他に、受験者は登場人物二人の役を使い分けなければなりませんでした。テキストには対話の部分が含まれていたからです。

選考には、予選という方法を採用しました。第一次予選で16人が選ばれ、第二次予選で6名、決選で以下の3名が勝ち残りしました。

- 一位、高橋 尚子 （99M3138）
- 二位、紺野由貴枝 （99J1247）
- 三位、衣川 佳憲 （99J1127）

なお、今年は学生たちの挑戦意欲がこれまでと比較して大変高かったことを指摘しておきます。

しかしながら、長い準備をさせて受験者にこの種のテキストの朗読を要求するだけでは、学生のフランス語の知識の程度を評価するのは難しいと思いました。来年度はもう少し難しい問題を出し、外国語の知識の程度がどうかを含めて、テストの条件をはっきりさせる時期が来ているのではないかと思います。たとえば、手本のテープを与えず準備なしでテキストを読ませるとか、予め選んでおいたテキストについてどの程度理解しているかいくつか質問をしてみるなどです。

（ラッセン、河原）

中国語部門

第6回外国語コンテスト「中国語部門」は、2000年12月7日（木）午後1時から213教室で「法学部・経営学部部門」と「現代中国学部部門」とに分けて開催された。それぞれの部門の参加者数は31名と13名であった。車道校舎からも1名が参加し、見事に入賞を果たした。

「現代中国学部部門」は「課題文の暗唱」と「自由課題文の暗唱」の二部門に分けて行った。「自由課題文部門」に挑戦した参加者の作文は、海外で感じた中国及び中国人についてのものが多かった。各自自ら作文した中国語を視聴者の前で暗唱して

見せた。その内容と表現力のすばらしさに初めて参加した私は感動の涙に誘われた。

「法学部・経営学部部門」では、31名の参加者があらかじめ用意された課題文を正しい発音と美しいメロディーで朗読することに努め、熱戦を繰り上げた。その後開かれた餃子パーティーにもコンテストの熱気はそのまま持ち越された。

今回の入賞者は次のとおりである。

法・経営部門

第1位	99M3488	中村 将士
第2位	97SJ1016	伊豆 明子
第3位	00J1063	田口 征吾

現中部門

・課題文の部

第1位	99C8180	林 義明
第2位	99C8044	水野 志保

・自由課題の部

第1位	99C8059	中田 美佐
第2位	99C8120	富永 清美

(鄭 高咏)

韓国・朝鮮語部門

2000年度、第6回外国語コンテスト(名古屋・車道校舎)韓国・朝鮮語部門は12月7日(木)午後1時半から名古屋校舎で開催された。

23名という多数の学生の積極的参加のもと、活発なコンテストが展開され、李 鳳姫(客員教授)、常石両教員が審査に当たった。今回も車道校舎から3名の学生(神谷 望、岩淵 肇、横尾 俊幸)諸君が参加した点は特記すべき点と言えよう。

厳正な審査の結果、入賞者は以下のごとく決定(敬称、略)

1位	98J1327	久野 幹太
2位	99C8180	林 義明
3位	98J1038	池田憲一郎

入賞は逃したものの、99M3003 榊原 丈、99J1062 原田 悠輔、00J1369 水谷 元昭、00J1146 大谷 節子、00M3312 治村 幸宏、諸君などは入賞者とほとんど差のない実力と努力の跡を示してくれた。

「下手でもよい。頑張ってみよう!」というのがこのコンテストの趣旨である。

今後も大勢の学生諸君の参加を望みたい。

(常石希望)

日本語部門

日本語部門では、外国人留学生12名(1年生7名、2年生5名)が参加しました。日本語の場合は他の言語部門と異なり、スピーチコンテストのため、発音・アクセント等、いわゆる日本語の能力だけでなく、内容の豊かさ、アピール度も重視して評価されました。発表者は、小さな身近な出来事を、異国の人でなければ気づかない視点から捉え、実に素直に自分の考えを述べていました。スピーチを聞いていた人達は、多くのことを学んだと思います。この号の最後に1位と2位の学生のスピーチを載せますので是非読んでください。

1位	99C8199	晋 斗鴻(ジンドゥホン)
2位	99C8198	高 秀希(コスヒ)
3位	99M3525	李 勤分(リキンフン)



入賞者は全員2年生となりましたが、1年生も多く参加しました(当日発表の7名は予選を通った人のみ)。残念ながら1年生は、まだ日本語能力の点で多少問題があるせいか、入賞できませんでしたが、彼らのスピーチはとても新鮮で、心打つ良いスピーチでした。彼らには是非来年度も発表してもらいたいと思います。

(山本雅子)

《日本語コンテスト入賞作》(原文のまま)

第1位 日本の素晴らしい若者

現代中国学部2年 晋 斗鴻

私は韓国からの留学生で、日本に来てもう3年になります。私はこの3年間の日本生活で、日本語や日本の文化など様々なことを学びました。今日はその中で、一つ感心したことについて話させていたきたいと思います。

私が日本に来て間もない頃、名古屋の栄に行ったときには本当に驚きの連続でした。それは、栄の町並みがあまりにも韓国と違っていたからとではなく、そこにいる若者があまりにも変だったからです。黒人に間違えるほどの黒くて不気味な化粧に下着が見えるほどの短いスカートはいて道に座っている女の子、黄色くて長い髪をしたきれいな男の子、白いタオルで顔を隠してバイクに乗っている暴走族、電車で年寄りの人が乗ってきても席を譲らない若者。それに比べると韓国の若者はすばらしい。年上の人によく挨拶をするし、電車でも年寄りを見かけたらすぐ席を譲るし、男の子は男らしいし、女の子は女らしい。韓国の若者のことが私の中では韓国人の自慢の一つになったし、変な若者を持つ日本の未来が心配にもなりました。

しかし、その若い人に対する私の思いが、大学に入って日本人の友達ができてからかなり変わってきました。その理由は、日本の若者の生活に感心してしまったからです。わたしの友達のなかに

天野という友達があります。その天野という友達は今年19歳で、もうそろそろ20歳になるにもかかわらず、わがままな性格で、どうもまだ子どもみたいところがある友達です。しかし、その生活をのぞいてみると驚いてしまいます。週に3・4回学校が終わった後にアルバイトをして、そのたまったお金をおこずかいにして学費以外は親から一銭たりとももらわない生活をしているからです。また、同じ学部の小百合という名前の女の友達は英語が習いたくて、この学校以外に英語の専門学校に通っているんですが、その学費の全てを自分でアルバイトをして、そのためたお金で払っている友達もいます。もちろんこの二人は例としてあげただけで、この二人以外にもほとんどの学生達がこの二人と似たような生活をしています。この若者達の生活は韓国と日本の若者に対する私の思いを変えるほどの驚きでした。ここにいる日本の方は、えー！何で驚いたんだろうそんな当然なこととと思われるかもしれませんが、しかし、その当然と思われる大学生のアルバイトが隣の国韓国では当然ではないのです。今から10年前のことですが、韓国で大学に通っていた私も全然アルバイトなんかしなかったし、学費はもちろん何にもかも親からもらったお金で生活をしました。これは、周りの学生達もみんな同じでしたし、現在もあまり変わっていないと思います。もちろん韓国と日本の社会構造が違うところはあるんですが、それにしても日本の若者の生活はすばらしいです。

普通、年寄りの人はどこの国でも若い人のことをあまりよく思わない傾向がありますが、特に日本の年寄りはそのだと思います。しかし、それは日本の年寄りが若者の変な格好だけに目が行ってしまって、経済大国日本を支えている若者の良いところまで見ていないからだだと思います。だから、日本の年寄りも、私が韓国の若い人の礼儀正しさを韓国人としての自慢に思っているように日本の若い人の良さを誇りに思うべきだと思います。さらに、もっと言いたいのは、私が日本の若者の変な格好にこだわって、若者ことを悪く思っていたのと同じようなことが、私たち韓国人と日本人の

間にもあるのではないかということです。私たちはあまりにも歴史問題にこだわりすぎて、お互いのいいところがみえていないのではないのでしょうか。私は日本の若者と友達になって、ようやくその良いところをみることができました。

ここにいる皆さんはどうですか？何か、韓国のことを知っていますか？私が日本の若者に偏見を持っていたように、韓国人に対して何か偏見は持っていますか？もし、そういう偏見があったら、ぜひそれを乗り越えるように努力してほしいです。これは、もちろん韓国人にも同じです。それで、このお互いの努力が20世紀の暗かった歴史を21世紀には明るい歴史に変えるのではないのでしょうか。御静聴ありがとうございました。

第2位 一緒に作っていきませんか
現代中国学部2年 高 秀希

私は去年の四月に日本へ来ました。韓国の空港で家族・友達と泣きながら別れをつげたのが昨日の事みたいはまだ生々しいですが、それからもう1年8ヶ月も過ぎました。この間に、色々なことを体験し、一人で悩むことも、面白いことも、不思議だと思ふこともいっぱいありました。今日は、体験した事を二つの側面から、私の意見と感想として皆さんに話したいと思います。

私は日本人と同じ一人の新生入生として愛知大学に入学しました。私は他の留学生とは違って高校を卒業してから直接日本の大学に来たので、学校生活の中で色々な指導を期待していました。しかし残念ながら、必要がなければ、話してくれない人が本当に多かったのです。その時は私の日本語も下手だったので私の方から先に話しかけることもできなかつたし、留学生だからこのように待遇されているのだと我慢するしか仕方がありませんでした。日本人の輪の中には本当に入りにくいと思いました。

しかし中には留学生を家族みたいに考えてくれる人もいました。私たち留学生を色々助けてくれ

るボランティア活動もありました。例えば、自分の家でホームステイさせてくれたり、花見に行く時やお正月の時誘ってくれる人もいました。また現代中国学部の中にも留学生の事にいつも協力してくれる学生たちもいます。この場合は、逆に留学生の立場が本当に幸いな事です。日本人の学生なら、こんな待遇はたぶん受けられないでしょう。

私はこの前、一泊二日のホームステイで、千田さんの家にお邪魔することになりました。その時、家族みんなと一緒に食べたおばさんの手作り料理の味は今までも忘れることができません。特に私が韓国人だから食事には欠かせないだろうとってキムチまで用意してくれました。食事の後には千田さんの車に乗ってイベントを主催した団体の会館に向かいました。そこでは着物を着させてもらいましたが、カメラまで用意してくれた千田さんは、私が着物を着る過程を一枚一枚全部撮ってくれました。本当に嬉しかったです。千田さんは自分がやったことを小さな事だと思ふかも知れませんが、私はその小さな心配りに感動しました。小さなことから大きなことを学びました。それはこのように小さな事までも親切にやってくれる、しかもそれをごく自然にやってくれるその細かい心配りが日本人の長所ではないかということです。私は感謝すると同時に本当に心から感動しました。

それからしばらくの事です。私はお好み焼き屋さんでバイトを始めました。店は店長さんと店長さんのお母さん、私3人でやっています。10時になると営業時間が終わって、それからは楽しい食事タイムです。ある日、10時になって私はもう終わったが、店長さんとおばさんはまだ後片付けをしていました。私はテーブルに置いてあるご飯の前で店長さんとおばさんが来るのを待っていました。すると、店長さんが「先に食べや」と言いました。「はい」と答えたが、なかなか箸をつけることができませんでした。韓国では目上の人と食事する時必ず目上の方がスプーンを取って、食べ始めてから食べるのが習慣になっています。店長さんはそんな私を見て「韓国人はやはり礼儀正しいなあ」とほめてくれました。私はその時初めて

「私にもそんな良さがあるんだな」と自分も知らなかった良さに気づきました。

この二つの体験を通じて私は強く感じたことがあります。それは日本人と留学生には、お互いは自分たちも気づいてない良さがたくさんあるはずだということですから、お互いの良さを見つけて、認め合うことから始め、それを重ねて行けば、今までなかった何かきつと作られるはずで、それも今までであったものよりもっといいものが作られるはずで、その何かを皆さん一緒に作っていきませんか。

名古屋語学教育研究室のホームページを開きました。

アドレスは

<http://leo.aichi-u.ac.jp/~goken/>

’01 公開講座「言語」のご案内

愛知大学言語学談話会

前半 豊橋校舎 / 後半 9月より車道校舎
午後2時半～4時半

2001年

- 7月7日 「主語、目的語、その他の文構成要素 W. クロフトの文法関係論を中心に」
伊藤忠夫（中京大学教養部教授）
- 9月22日 「ロシア語の移動表現について」
清水伸子（愛知大学経済学部講師）
「EUにおける言語教育政策 オランダの外国語教育の現状」
平尾節子（愛知大学法学部教授）
- 10月13日 「身体と空間」
片岡邦好（愛知大学法学部助教授）
「近代初期イギリス人の国語観、国語問題」
多田哲也（愛知大学法学部助教授）
- 11月10日 「飲食に関する中国語の楽しい表現」
鄭 高咏（愛知大学法学部助教授）
「漢詩の流れ 詩形を中心に」
矢田博士（愛知大学経営学部助教授）
- 12月8日 「学習文法とコーパス⁽³⁾」
塚本倫久
（愛知大学国際コミュニケーション学部助教授）
「大学における中国語教育の再検討⁽²⁾」
安部 悟（愛知大学現代中国学部助教授）

2002年

- 1月12日 「日本語話者がフランス語を通して見た韓国語」
田川光照（愛知大学経営学部教授）
「漢字文化圏における表音文字の背景」
陶山信男（愛知大学名誉教授）

編集後記

21世紀は日本の世紀である、などと煽てられ、日本中が浮かれ騒いだのは10余年ほど前のことである。儲けをたくらんで株を買い漁った経済官僚や経済学者が何人も損をして、彼らの学説の化けの皮が剥がれた。景気浮揚の学説はないものか、いろいろ説を唱えるものはいるようだが、世の中は理論どおりにはうまくいかない。

この惨めな日本にかわって登場したのが、中国である。封建時代、毛時代と民衆は長きにわたり貧しいままに捨て置かれていたから、富への渴望は、当然ながら、異常なほど激しく、今世紀が中国の世紀になることは間違いないであろう。13億の民がいま金持ちになるため競い合っている。

しかし、この資本主義を指揮しているのが共産党というのだから、驚きである。共産主義運動が民衆を解放し、平等という価値に目覚めさせたその歴史的功績は高く評価されるべきだが、共産党にとって、欲望が人間を労働に向かわせるものである、衣食が満たされてもそこで欲望が消え去るものではない、飽くなき欲望こそが社会発展の原動力であることが分かったいま、共産党も昔のままでいてはならないであろう。20世紀までに政治・経済・文芸・芸術など多くの面で主義主張が出尽くした感がある時、我々は共産的資本主義とも呼ぶべき新しいモラル獲得の壮大な実験場に立ち会っていることになるのであろうか。それはつまり外資を利用して経済規模を拡大し富の高上げを実行して、得られた富の分配を世界中どこにも前例のない公平さで行うことであろうか。服部先生の記事を読みながら、こんなことを思ってみた。

(S. K.)